

○九月二十七日月次勝負の結果

二級へ 伊藤文健、津守純、甲谷龜藏

一級へ 茂木信太郎、尾上和男、田野元次、香山吉助、舟木道敏、岩垂捨三、北村孝次、西澤又一郎

○十月の大會及び十一月二十一日の月次勝負の結果

二級へ 伊藤親雄、中村武雄、古谷次一

一級へ 津守純、野田市太郎、塚田修二、伏見正三、後藤辰治、佐藤米藏、平本六郎、山崎善賢、石塚彌之助

○十一月十九日講道館昇段式に於て

初段へ 田中祐吉、東野衛、川崎勝馬

二段へ 山崎三郎、片山國忠、岩崎清一郎、服部倉三郎

一九 大正四年史

(一) 寒 稽 古

例年の如く一月十三日寒稽古を始む。寒稽古中に、先輩盛田保三氏の友人にして、先般青島攻撃に參加したる江渡少佐の戰爭談あり。この日は寒稽古を一と朝休みとなした。會する者二百名、中々の盛會であつた。夕刻新舊幹事及び先輩等今福に會し晩餐を共にした。

又一月三十日には寒稽古終了會を開き、師範の訓辭あり、四名の精勤者及び百名の皆勤者にそれゝ證狀を授與し、後薩摩汁の御馳走に一同舌鼓を打つた。

(二) 卒業生送別紅白勝負

二月二十一日。

(紅)

勝 松 尾 倪
原 西 安 井

(白)

岡 尾 田 村
金 本 安 田
(大外刈) 原 国 (合業)

(背負)

添 潮 西

(大外返)

川 潮 西

五 宮 色
(大外刈) 土 原

(背負)

島 下 摩 井
高 上 宮 黒 宮 金 本
(大外刈) 原 永 澤 川 澤 川 國 (合業)

(押込)

(合業)

清 今 井 飯 中 井

水 關 口 島 泉 花 崎 田 野 村
茂 田 伊 西 岩 高 勝 森
木 (邦) 卷 (返技)

(同押込)

藤 (常) (押込)

(跳卷)
(絞)

(内股)

鈴 岸 竹 伊 永 津 菅 葉 出 田 茂 岩 阿 阿 相 篓 絡 緒 近

藤 田 方 藤 福 田(善)(返技) 田(善)(返技) 伊 藤(文) 守(釣込足)

木 田 内 藤(親) 井 田 原 山 口 木 嶺 部(英) 部 澤 田 方 藤 福

田 甲 中 福 湿 進 志 松 高 橫 田 森 崔

中(健)(跳腰) 谷(大外刈) 村(返技) 田 美(跳卷) 藤 賀(返技) 村 井 井 永(大外刈) (合業) (小内刈)

(跳腰返) 尾 菅 岡 川 大 田 舟 松 茂 岩 中 後 石 (合業) 伊 藤(文)

上 井 崎 関 中 木 永 山 木 垂 藤 塚 守(釣込足)

幸 坂 神 吉 吉 小(以下山内)(押込) 甲 水 伏 山 西 佐 津

田(合業) 東(?) 川(跳腰) 崎(跳腰) 年 泽 崎(?) 菲 永 見 泽 藤 藤 守(釣込足)

(以下有段者)
(以下有段者)

(以下有段者)

(以下有段者)

(以下有段者)

(以下有段者)

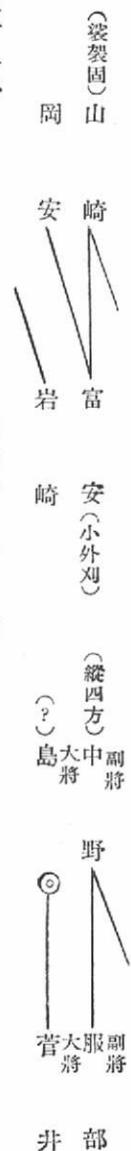
(以下有段者)

(以下有段者)

(以下有段者)

(以下有段者)

(以下有段者)



五人掛
岡 安 崎 富 岩
三段 飯 塚 茂
○○○○ 同 岡
・ 同 田 中(體落)
二段 菅 井(押込)
同 服 部(?)

初段 小 山
内(返技)
中(體落)
(押込)

後芝浦見晴亭に宴會を開く。來會者先輩卒業生を併せて五十三名、頗る盛會であつた。
本年度卒業生

三段 飯塚 茂、島泰次郎、菅井邦義、徳永秀夫

二段 岡安寛司、藤平 真、山崎三郎

初段 桑原正憲、森 春松、久留島健三郎、川崎勝馬、吉年研三、平賀千代吉、吉澤憲治
一級 加藤春之助、田野元次、山口達也、香山吉助、川口辰造、平木六郎、茂木信太郎、水永 翠、塚田修二
二級 日東寺政男、土井徹太郎、渡會徳太郎、菅原剛寛

(三) 新人部員歡迎紅白勝負

五月八日午後一時より新入部員歓迎の爲め成年組の紅白勝負を開く。その戦績左の如し。

(紅)

(白)

(右鉤込)

黒澤鹿森

松崎嶺林

(背負)

高澤鹿森

瀬崎村初田

(跳腰)

中村近清

利佳木中(押込)

(合業)

原中

木利佳木中(押込)

(足拂)

原中

金利佳木中(押込)

(押込)

原中

山俱吉五

(小内裏)

原中

宮平針吉

(大外返)

原中

藤小

(大外刈)

原中

井上藤

(押込)

原中

飯永垂

(跳腰)

原中

松川上

(鉤込腰)

原中

地崎永

(押込)

原中

今井

(合業)

原中

(大外)

(跳腰)

藤林川

谷澤賀畑代

(大)

進小相岩森

(合業)

部(英)(合業)
木(背負)

永

木藤水田木

木藤水田木

(外返刈)

勝甘田岩上

(外刈)

勝甘田岩上

(大外返刈)

利佳木中

(大)

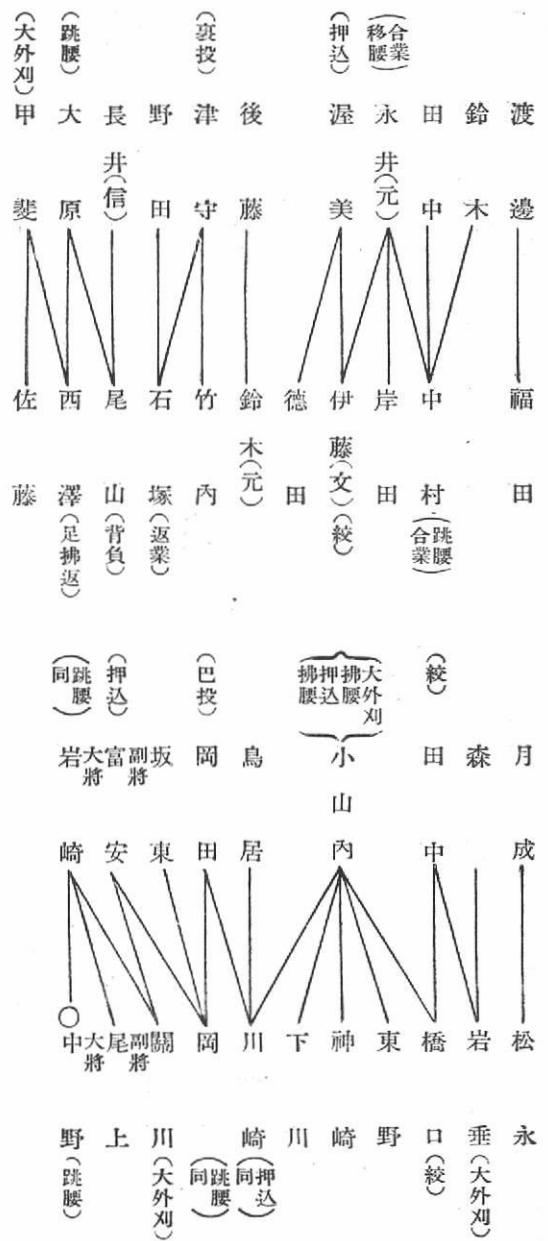
利佳木中

(外刈)

木利佳木中

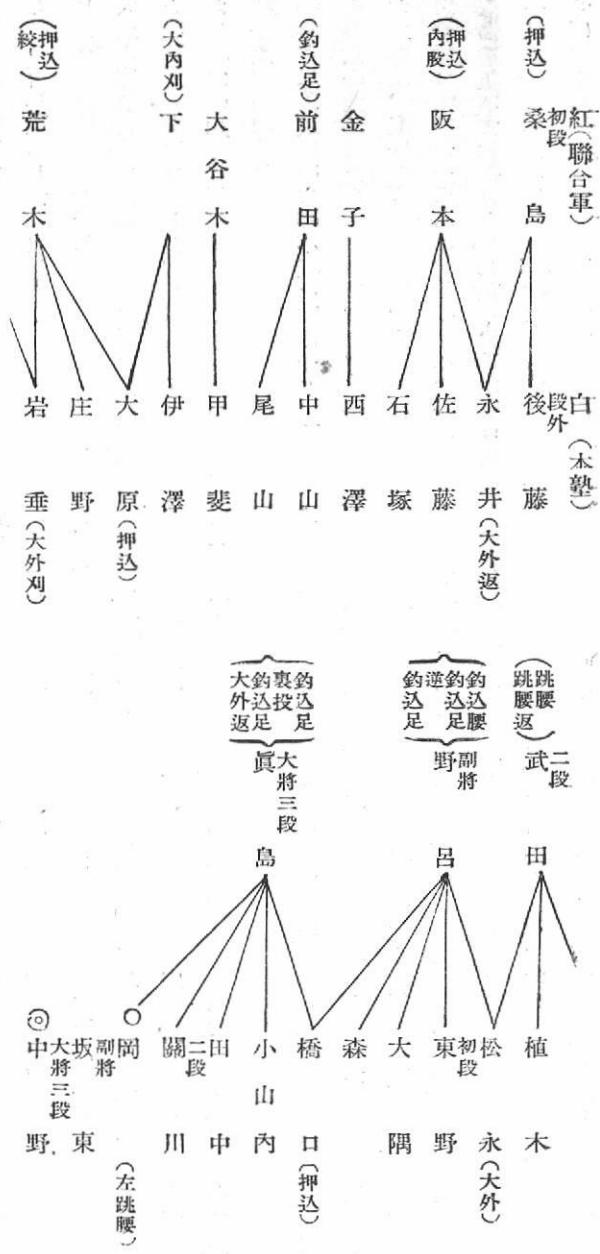
(大)

木利佳木中



(四) 対四校聯合勝負

六月五日午後二時より本塾道場に於て舉行。双方各々七十七名。本塾側(白)は初より武運に恵まれ、聯合軍側(紅)の初段が出る時に、無段者十四名を餘してゐる勢であつた。左に有段者出陣以後の勝負表を掲げ、下川生の當時の觀戦記に依つて戦況を窺ふことにしよう。



『見渡せば紅軍振はずして、白軍に無段者尙十四名を残せり。何ぞ紅軍斯く振はざるかと、悲憤の涙を洟しつゝ初段桑島陣頭に馬を進むれば、白軍の後藤好敵御座んなれと激しく戦ひ、跳腰屢有望に見へしが押込に敗れ、永井代て出づ。物々しき敵の振舞かなと、焦つて射出す桑島の大外刈を美事に返して阪本に向へば、阪本狂へて永井を内股に取り、續く佐藤をも押込み、石塚出でて鬪へど勝敗容易に決せず、遂に他日の再戦を期して分るれば、紅軍は金子白軍は西澤を出し

て雌雄を決せしむ。兩士能く戦ひ、西澤背負に攻むれば、金子内股を以て之れを防ぎ、火花を散らして奮闘せしが、遂に勝敗決せずして分れしは、共に好敵手と見受けたり。

『次に出でしは紅の前田、白の中山なり。中山近來元氣頗る旺盛、此の勝負如何あらんと觀る間に、中山得意の大外功を奏せんとせしが、却て前田が得意の右支釣込足極つて敗れしは、長蛇を逸したるの感なきにしもあらず。尾山戦友の仇思知れと前田に向ひしが、敵もなか／＼去るもの、遂に勝敗決せずして分る。代るは紅大谷木白甲斐なり、互に攻めつ攻められつ暫し戦ひしが、之れ亦勝敗決せずして分るれば、紅軍は老巧下を出して白軍の伊澤に當らしむ。それ下は聲名斯界に高からずと雖も、千軍萬馬の老將なり、伊澤なる者努めざるべからずと見る間に、大内刈にて下に名をなさしめ、大漢大原小癪なりと云はんばかりに躍り出し下を押ゆれば、紅軍に其人ありと知られたる荒木、猛然として現れ、大原之れもと跳腰返し美事なりしが、止めを刺すに至らず、遂に押へられて庄野と代りしは無念なり。庄野銳く攻めしが、大漢動かさる事山の如く、却て釣込腰にて戦友の後を追ひ、新進の花形岩垂出で、猛り狂へる荒木を倒して、銳く腕の逆に行けば、拍手急霰の如く起りぬ。

『愈々二段武田味方の不振を眺めつゝ、勝誇れる岩垂を極意の跳巻にて取り、續く植木を美事に返して松永に向へば、松永得意の大外難なく武田を壇す。副將野呂重任を負ふて現れ出で、奮戦して味方の陣形を整へざるべからずと、松永を右釣込腰に、東野を支釣込足に、大隅を腕逆に、森を支釣込足に、恰も無人の境を行くが如く、斬り込む太刀先頗る銳し。白の橋口味方の一大事と、荒れ狂へる野呂を奮然として押込めば、自らも數度の戦闘に既に刀折れ矢盡き、身には幾多の重傷を負ひて如何ともなし難く、遂に橋口に名をなさしめしが、實に天晴の武者振りなりき。

『紅軍御大眞島、衆望を一身に集めて仁王立ち、先づ橋口を支釣込足に飛ばし、次なる小山内を力戦數刻の後裏投にて壇せば、小軀能く戦ふ田中出でて銳く攻めしが、之れ亦支釣込足にて敗れ、鬱川我れこそ敵の大將を討ち取りて功名せんも

のと、虚々實々火花を散らして鬪ひ、此處ぞと打出す大外刈、惜しや返されて徒らに眞島の戦功を大ならしめぬ。岡怒髪天を衝き、物々しき敵の振舞かなと、眼光鋭く機を見て打出す跳腰美事に極つて、御大眞島も茲に名譽の戦死を遂げぬ。斯くて白軍は大將中野副將坂東を残して四度優勝したり。

『終て懇親會に移り幹事坂東氏開會の辭を述べれば、各學校代表者交々立て所感を述べ、勝負に負けても餘興に負けずと聯合側意氣頗る旺ん、各自遺憾なく歡を盡して、全く散會したるは九時過ぎなりき。』

(下川生)

(五) 第二十五回 大會

十月三十一日

(普通部)

(大外刈)
高地萬里
五男一男

(商工部)

山川昇

高鹿正夫
川崎八次

(押込)
安増潤一郎
野崎誠一郎(大外刈)

渡邊義道

阿部英兒
中西萬世

茂木芳次郎
前田誠一郎

(押込)
横山嚴

崔燦鶴
中村隆一

茂木邦吉
染谷芳藏

(背負)
阿部大六
高橋長二

松村纏彦
中村健吉

若槻清一◎

(押込)
岩井茂

進藤茂
森永義忠

大將澤久一郎
大將井

(副將)
大將福田與志三郎(押込)

(大將)
篠田富士男
松永義徳

三本勝負

(有級者)

(高輪) ○	山田琴司	(講) ○(講)	佐藤金之助(押込)
(二) ○	西沼富士太郎(大刈)	(高商) ○○(講)	松村繼彥
(高輪) ×	高木隆藏	(早大) ○○	横山哲
(三) ×	今關清	(附中) ○○	横山巖(跳腰)
(高輪) ×	梅園秀松	(附中) ○○	田中良一
(四) ×	岩垂梅四郎	(附中) ○○	福田善四郎(綾落)
(錦中) ○○(水)	横山晋作	(附中) ○○	岸高朝雄
(五) ○○(水)	鎌田讓(同裏拔)	(附中) ○○	尾信一(鉤込足)
(六) ×	宮永金太郎	(附中) ○○(早)	横澤榮(大外返)
(七) ×	添野郁	(附中) ○○	中村隆一(背負)
(農大) ○○(獨協)	山下彌三左衛門	(附中) ○○	沖山阿部英兒(大外)
内村祐之(移腰)	吉田精二	(附中) ○○	岸高志賀勝治(足拂)
川崎八次	飯泉甚兵衛	(附中) ○○	森永義忠(跳卷)

(講) ○(講)	佐藤金之助(押込)	(七) ×	島野高井
(高商) ○○(講)	松村繼彥	(八) ○○(講)	白井
(早大) ○○	横山哲	(附中) ○○	岩崎
(附中) ○○	田中良一	(附中) ○○	平石琢二
(附中) ○○	福田善四郎(綾落)	(附中) ○○	福田與志三郎(大外)
(附中) ○○	岸高朝雄	(附中) ○○	藤田暢太郎
(附中) ○○	尾信一(鉤込足)	(附中) ○○	山田茂
(附中) ○○	横澤榮(大外返)	(附中) ○○	志賀勝治(足拂)
(附中) ○○	中村隆一(背負)	(附中) ○○	岩井茂(大外)
(附中) ○○	沖山阿部英兒(大外)	(附中) ○○	藤田暢太郎
(附中) ○○	岸高志賀勝治(足拂)	(附中) ○○	山田茂
(附中) ○○	中村阿部英兒(大外)	(附中) ○○	岩井茂(大外)
(附中) ○○	岩井茂(大外)	(附中) ○○	藤田暢太郎
(附中) ○○	藤田暢太郎	(附中) ○○	山田茂
(附中) ○○	山田茂	(附中) ○○	藤田暢太郎

(高工) ○○(日宗)	高松丈夫	(高工) ○○(日宗)	島野高井
(高工) ○○(日宗)	志賀勝治(足拂)	(高工) ○○(日宗)	山田茂
(高工) ○○(日宗)	岩井茂(大外)	(高工) ○○(日宗)	藤田暢太郎
(深田) ○○(日宗)	岩井茂(大外)	(高工) ○○(日宗)	島野高井
(深田) ○○(日宗)	中澤和茂(大外返)	(高工) ○○(日宗)	志賀勝治(足拂)
(深田) ○○(日宗)	瀧川純三	(高工) ○○(日宗)	岩井茂(大外)
(深田) ○○(日宗)	和茂(大外返)	(高工) ○○(日宗)	藤田暢太郎
(深田) ○○(日宗)	瀧川純三	(高工) ○○(日宗)	島野高井
(深田) ○○(日宗)	和茂(大外返)	(高工) ○○(日宗)	志賀勝治(足拂)
(深田) ○○(日宗)	瀧川純三	(高工) ○○(日宗)	岩井茂(大外)
(深田) ○○(日宗)	和茂(大外返)	(高工) ○○(日宗)	藤田暢太郎
(深田) ○○(日宗)	瀧川純三	(高工) ○○(日宗)	島野高井

(二五) (獨協)	○	石上 阿部	實(背負)
(二六) ○(講)	○	瀬廣 潤	(押込)
(二七) ○(明大)	○	川早 要	行信
(二八) ×	○	原安 藏(絞)	顯
(二九) × (高師)	○	佐藤 末藏(合技)	太郎(大外)
(三〇) ○○(外)	○	庄渡 邊政	吉
(三一) ○○(錦中)	○	及川 三男(跳腰)	太
(三二) ○○(深田)	○	木横 芳次郎(内股返)	山人(拂腰)
(三三) ○○(廣瀬)	○	永光	海人(拂腰)
(三四) ○○(水)	○	山本中村	本武
(三五) ×	○	藤原惣次郎	岡本(合業)
(三六) × (水)	○	近藤後藤	山本(大外)
(三七) × (東協)	○	津守辰治	雄(跳腰)
(三八) ○(高)	○	小原純	近藤(大外返)
(三九) ○○(?) (東協)	○	萩原健吉	守(背負)
(四〇) × (深田)	○	中田信市	宮二(大外返)
(四一) ○○(講)	○	木澤永井	品川渡邊
(四二) ○○(深田)	○	藤井澤伊	松野(足拂)
(四三) × (講)	○	道永井	品川(腰外投)
(四四) ○○(深田)	○	藤井澤伊	品川(合業)
(四五) × (高工)	○	道永井	品川(高工)
(四五) ○○(農大)	○	藤井澤伊	品川(高工)
(四六) ○○(高師)	○	敬義智(跳腰)	品川(高師)
(四七) ○○(高師)	○	坂本斐	品川(高師)
(四八) ○○(高師)	○	甲斐	品川(高師)

(有段者)

(初段)

植木義雄——○久保山熊二郎(講)先陣を承つて躍進したるは植木。變化に富んだ技で秘術を盡して肉薄したが、敵もさる者長身を利用しての跳腰で、遂に名譽の戦死を遂げた。

大隅敏雄——○岡崎茂助(講)體軀等しくして好敵手。大隅君の奮闘効なく、大外刈の合せ技で惜しい敗をした。

月成元氣——×——鈴木 好(深田)月成は軽快無比、得意の大内刈は對手となつた者の常に恐るゝところ、鈴木も亦警戒おさおさ怠らず、其猛撃を避けて遂に引分は惜かつた。

岩垂捨三——×——福 井(一高)此の戦では堅實な捨さんであつた。大外で矢纏早に攻め立てたが、殘念にも引分となる。

◎神崎清一——×——後藤再三(東協)我軍の奮はざるに氣を焦ち、憎づくき敵の振舞かなと武者振勇ましく陣頭に現れたるは神崎、敵の猛襲を物ともせず、大内刈で一本、次で來た跳腰を何のと返し、合せ技で敵を斃した。君や我軍最初の優勝者で、其功や又大なりと謂ふべし。

幸島正路——×——前田 貢(農大)力戦の後引分。久しう稽古せざる君にして此の奮闘あり、亦偉大なりとすべしである。

森 久則——○戸次雄次郎(講)森君の内股其効を奏せず、無念にも押込で敵に名をなさしめた。されどペストを盡して斃る、此れ武士の本領である。

川崎勝馬——×——鍋島政之助(早大)川崎常に攻勢を執つて肉迫したが、敵はよく守り遂に引分。松永進一——○三浦茂雄(講)元氣瀟灑たる君、無論勝は味方と思ひきや、可惜大外と足拂で無念の最後を

遂ぐ。

東野 衛——×——荒木本達（日宗） 東野は短軀、敵は鬼をも挫ぐ肥大漢、此強敵に對して正々堂々の陣を張り、敏捷以てよく攻めよく防ぎて引分、超弩級艦を潜航艇が苦しめた觀があつた。

(二一 段)

◎田中祐吉——武 田（農大） 田中の足技は實に奇麗で心地がよい。大きな敵の圖體を小内刈で二度大き

く倒した。君が名譽ある我軍の第二優勝者だ。

山 内（高師）——×——野呂 信（農大） 兩方大事をとつての引分は、何だか物足らない氣がした。

小山内信——○大部二郎（中央） 小山内の方が優勝で攻勢を取つて居たが、どうしたはづみか、殘念にも跳

卷に斃れた。

幸田 義——○平 賀（早大） 幸田は我軍の技士として既に定評がある。然るにこの日は何故か振はなか

つた。遂に惜くも大内刈に敗れた。

○尾上繁三——○星高豊作（高商） 火花の散る様な接戦だつた。敵も剛の者矢纏早に攻め寄せ、先づ釣込で一本取つた。此れに憤慨して尾上君の跳巻が飛んで美事に敵を投げ飛ばした。かくて兩方肉薄接戦好く攻め好く防ぎ、今や引分と見へた時、遂に腕の逆で敵に勝を譲つた。

今日は如何なる日ぞ、我軍武運拙なく枕を並べて勝を敵に委した者が多かつた。然れ共勝敗は此れ兵家の常、勝つ事を知りて敗くるを知らざる我柔道部に取りて、此の敗は尊き賜であつた。（柔道部々報十號所載筆者不詳）

(六) 飯塚師範就任十周年祝賀會

附、先輩對現部員試合

(下川記)

十一月七日、晚秋愈々深くして吾人の意氣益々昌なるの秋、我柔道部にては前部長青木徹二氏を始め在京先輩諸氏發起の下に、師範飯塚先生就職十週年の勞を犒ひ、一大記念祝賀會を開催し、併せて塾員對塾生紅白勝負を舉行したり。

祝賀會の報一度傳はるや、來つて此の會を盛大になすこそ舊師に對する報恩の道なれど、遠く九州よりは箱田達磨氏、神戸よりは平賀恒次郎氏、大阪よりは石渡泰三郎氏、千葉よりは中野榮三郎氏、其他中村愛作、湯本芳三郎、吉武吉雄、山田又司等の諸氏を初め、全國の津々浦々より來り會する有段者殆んど四十名、實に近來の盛事にして、以て先生の人格徳望の一般を知るに足るべし。

午後二時前師範内田良平氏審判の下に、呼出係は（紅）福澤（白）永井を出場せしめて、旺なる紅白勝負に移りしが、勝負半ばにして祝賀式に移り、幹事尾上繁二氏部員總代として祝辭を朗讀し、十年の恩に報ゆるに記念品の贈呈を以てすれば、青木徹二氏發起人一同を代表して起ち、先生が十年我が部に盡されたる勞を謝して將來の希望に及び、全國より斯く多數の舊部員が參集せられたるは、一に先生の徳望の致す所なりとして之を稱讃し、内田良平氏寄贈の太刀一振を先生に贈呈したり。

柴田一龍氏舊部員に代つて快辯を振て曰く『十年一日の如しといふことあり、之を口にするは易く、亦之を筆にするも容易なり、然れども之を實際にするは頗る難し、飯塚先生にして初めて此の事あり』とて先生の偉なる所以を述べられた

り。次に武藝の達人として知られたる塾員草郷清四郎氏老體を運びて壇に立ち『自分が慶應義塾に學びたるは慶應二年なり、此時飯塚先生未だ御在世にあらず』と、前提を遠き昔に措きて滿場を洪笑せしめ、其れより談は古き鐵砲洲に及び、時勢の變遷は武藝をも變遷せしめたりと論じ、意氣尙旺にして壯者を凌ぐの概あり。最後に前師範内田良平氏は、自己と飯塚先生、自己と慶應義塾、其處に奇なる因縁ありて今日に及びたる所以を説き、終て飯塚先生徐に演壇に進み、極めて壯嚴なる口調にて、今日斯くの如き催をせられたるも、既往を回顧すれば何等なす事なくして今日に及びたりと、頗る謙遜なる態度を以て一同に感謝の意を表されたり。

それより再び勇壯なる紅白勝負に移る。いでや禿筆を呵して當時の戦況を語らんかな。

紅の先鋒福澤蠻勇を振ひ奮戰頗る猛烈なりしが、惜しや永井の移腰にて歎聲白軍に揚る。長塚當年の意氣尙衰へず、小内刈に永井を殲して中山に向ふ、互に激しく戦ひしが、體落にて長塚敗れ、老巧峰岸狂へる中山を絞めて伊藤に向へば、新進の元氣者伊藤外掛にて峰岸を殲す。小野現はれ、昔得意の跳腰屢々奏功せんとせしが、遂に跳巻に敗れて下川出づ。下川銳く寢業に攻め、伊藤能く防ぎしも絞にて敗れ、代て甲斐跳腰にて下川を打ち、盛田に對す。兩士奮戰數刻、互に秘術を盡して争ひしが、勝敗決せずして分る。

改つて出でしは關に金子なり。彼に老練の業あれば是に新進の氣銳あり、互に激しく奮闘せしが之れ亦勝敗決せず。代るは岡安に庄野なり。庄野能く戦ひしが、老練岡安が得意の支釣込足極まつて松永出づ。松永内股にて岡安を討取りて伊豫田に向ふ。火花を散らしての奮戰頗る目覺しかりしが、伊豫田の巴も功を奏さず、松永の内股も敵を殲すに至らず、再戦期し難き此の勝負、實に力の入りたる試合なりき。代つて山崎、岩垂出づ、此の勝負如何あらんと思ひ居る内、岩垂得意の大内刈にて何なく山崎を殲せしは天晴。

形勢白軍に利ありて紅軍振はず、此の時に當り紅軍に蓋世の英雄出でずんば、味方の陣形を如何にせん。時なるかな三

段菅井、勝誇れる岩垂を足の逆に、續く大隅を腕の逆に、尙も森を足の逆に取りて氣を吐けば、神崎出でゝ押込み、拍手の中に山中出づれば、得意の左腰美事に極つて神崎敗れ。觀る者其強烈なる腰に驚かざるなし。聞く往年徳三寶を其腰にて投附けたりと、亦快なるかな。東野代て現れしが、山中の攻撃頗る猛烈にして、動もすれば東野危からんとせしが、時至りて引分。改つて（紅）高橋（白）川崎出づ。高橋は曾て足業に名ありし者、川崎亦寢業に妙なる者、互に激しく渡合しが、機を見てかけたる得意の大外美事極つて高橋勝てば、橋口代つて現れ、橋口攻撃頗る急にして流石の高橋をして防戦の違なからしめ、遂に背負に之を討てば、新進の塾員徳永現れ、何なく橋口を小内刈に燈し、猛然として小山内を迎ふ。虚々實々互に秘術を盡して奮闘せしが、勝敗容易に決せず、小山内が得意の拂腰も、徳永が得意の跳腰も、共に功なくして分れ、紅軍は大塚、白軍は田中を出すに至れり。勝敗如何にと見る間に、田中得意の大内刈にて大塚を燈せば、小癪なりと云はんばかりに昔の猛漢古川出で、激しく攻むれど田中もさるもの、能く防ぎ能く戦ひしが、遂に釣込腰にて古川勝ちて菅井に向ふ。菅井元氣當るべからず、攻撃頗る猛烈にして古川を絞むれば、奮然として塚本現れ、狂へる菅井を腕の逆に取り、續く坂東と激しく渡合ひ、火花を散らしての白兵戦物凄く、塚本當年の意氣尙衰へず、遂に絞にて坂東を打取りしは天晴、觀る者君が圓熟せる技倅に恍惚たり。老巧尾上勝誇れる塚本を一本背負に掛けて佐野に向ふ。曾て佐野は印度に聲名を馳せし者、一進一退火花を散らして戦ひしが、勝敗遂に決せず。

戦は進み進んで、益々佳境に入れば、紅軍は愈々四段山田を出して、白軍氣鋭の岩崎に當らしむる事となれり。觀者堅唾を呑んで勝敗如何にと眺むれば、兩士秘術を盡して戦ひ、一舉一動誠に美事なりしが、遂に岩崎の得意の跳腰美事極る。次は大兵肥満の吉武、憤然として岩崎に向ふ。拍手急収の如く起りて聲援頗る旺なり。吉武其優れたる膂力を以て岩崎を押込み、幸田に對す。幸田勇戦力闘能く努めしが、吉武を燈すに至らず、遂にチン／＼引分は満場の拍手暫し鳴りも止まず。代て（紅）中野（白）關川出づ、堂々たる體軀共に好個の對戦、中野鋭く拂腰に攻むれど、關川が防備なか／＼に

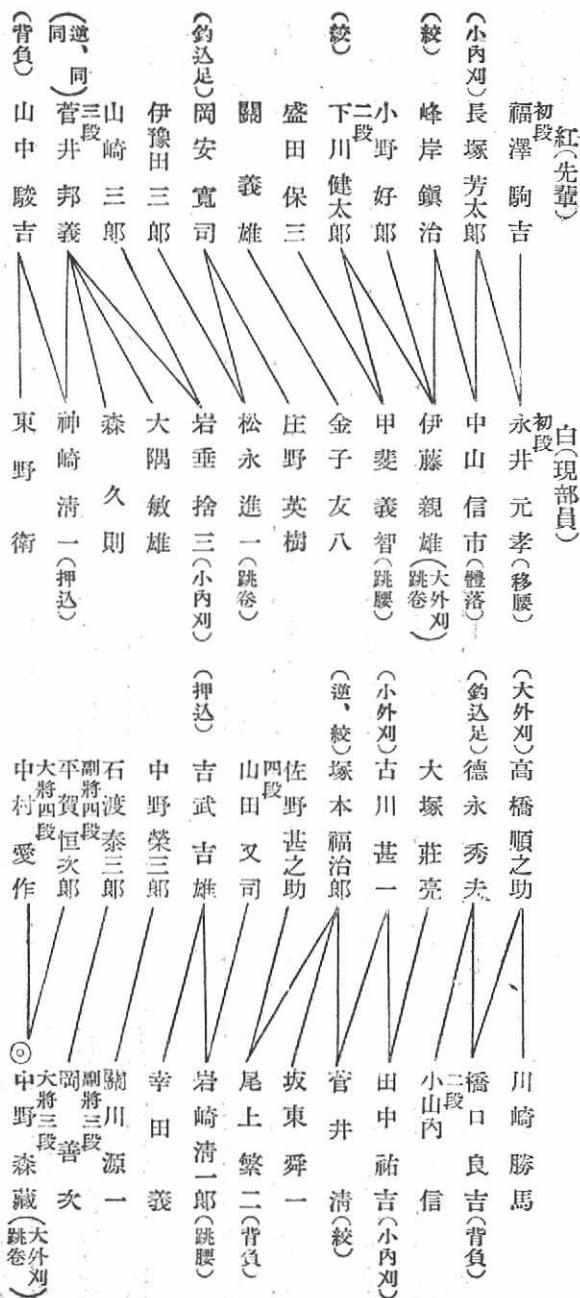
堅く、關川又體落を以て中野に應ずれど、如何ともする事能はず、遂に引分は力の入りたる勝負なりき。

茲に於て紅軍は、愈々飛將石渡を出して白軍の副將岡に當る事となれり。岡蠻氣激測たりと雖も、石渡の意氣尙旺なり。勝敗如何にと眺むれば、兩士秘術を盡して戰ふ様頗る猛烈。石渡銳く寢業に攻むれば、岡防戦能く努め、遂に時至りて引分は是非なし。代つて出でしは、紅軍に其人ありと知られたる副將平賀に、白軍の總帥中野なり、平賀塾を去て五春秋、吾人は君の風貌に接せざる事久し、今偶々君の雄姿を眼前に拜す、君尙旺にして當年の霸氣あり、之れ吾人の欣喜に堪へざるところ、滿場醉へるが如き其中に、兩士の健闘頗る痛烈、互に火花を散らして戰ふさま恰も猛虎の狂へるが如く、中野危く見へしが、遂に大外にて平賀を壇して御大中村に向ふ。中村紅軍の興廢を一身に荷ひて親しく馬を陣頭に進むれば、中野更に勇を鼓して身を堅む。兩龍爭ふところ風雲を生じ、戰ひ頗る猛烈にして滿場を熱狂せしめしが、遂に中野得意の跳腰は白軍に凱歌を揚げしむるに至れり。

あゝ人旺んなる時は天に勝つ、今や大將中野の意氣將に天を衝かんとするの概あるは、吾人の誠に意を強ふすることろ、君更に研磨の功を積みなば、やがては平賀、塚本、石渡、中野(榮)諸氏の後繼として、斯界に霸を稱ふるの期近きにあるべし。

其れより四段箱田達磨、四段湯本芳三郎兩氏の三本勝負、及び二段盛田保三、二段諸遊慎吉兩氏の三本勝負あり。終て此の役の戰功者塾員塚本福治郎氏、及び塾生中野森藏兩氏に特別賞品として、内田良平氏寄贈の太刀各一振を贈り、青木徹二氏發聲の下に柔道部萬歳並に飯塚先生の萬歳を三唱し、其れより塾員方は芝浦見晴に、塾生方は道場に盛なる祝宴を開きたり。

勝負表左の如し。



(七) 雜記

在大阪先輩の和歌山行

「去年の暮に、同窓の柳彌五郎君が和歌山中學校の野村校長に話をしたのが動機となつて、是非一度来て貰ひたい。そん

(石渡生)

なら行かふと云ふのが始まりで、一月七日の日曜日に和歌山へ行く相談が成り立つた。附屬にベースボール組迄編成して、會長には先輩の金澤君を推し、阪神慶應俱樂部といふ銘を打つた一行、さつと其顔觸れを擧げる。

柔道部

金澤冬三郎、平賀恒次郎、石渡泰三郎、松尾恒四郎、近岡源三、守谷正毅、水島竹雄

野球部

柳彌五郎、柳雄克、平賀恒次郎、尾崎正文、述川榮一、箕輪保、佐々木勝磨、奈良原健三(缺席)

風聞する所、和歌山へ曾て柔道の斯んな勢揃で出かけた事がないと云ふので、素敵な評判、六日の晩に神戸組の平賀、守谷、水島、松尾の四氏と、近岡、石渡、柳(雄)の大坂組とが先發として出かける事になつた。此の日は又別しての寒さ午後七時廿四分の灘波發和歌山行電車を待つ間も、到底素面では我慢が出来ない。何分酒豪揃の事とて、早速驛前南海食堂へ飛び込んで、サンドウキツチに熱爛で一寸一杯。白いテーブルの上には黒帯で眞中を結んだ稽古衣がゴロゴロ、大部分人目を引いた。酒の酔がソロソロ面へ現はれる時分には、氣煙も大分上つて來た。補充の堀詰澤の鶴までポケツトに納めて、ハイカラ姿に稽古衣をさげて車内に乘込んだ。

寒い冷い夜の空氣も、アルコールの力ですつきり消して、一時間半と云ふものは前後不覺、漸く淡の輪で出迎て呉れた中學の柔道部長の春田氏と、舊早大野球部選手(現今和歌山市役所勤務)大村氏と握手をして、二言三言雑談を交へる中に和歌山驛へ着いた。何だか秋の柔道部の遠足のやうな感じがした。皆枕を並べて昔の書生時代の夢を結んだ。

七日朝來快晴、金澤君と柳君が早くからやつて來た。連れ立ちて中學校へ行く。

全部敷き詰めれば百五六六十枚も敷けるといふ立派な道場が、柔劍二道に分れて居るが、中學の道場としては一寸他に其比を見ない。

凡ての準備が出来上つたので、會長の金澤君から、一行の目的が體育獎勵の爲めと云ふ處から來た事や、柔道の沿革及び之れに關聯しての處世の要道と云ふ澁い處を一席演じて、早速實地練習として、先づ僕と松尾君が投の形をやり（取り石渡）續いて亂取り及び稽古を一通り済して、晝食で野球の連中と交代した。

一寸斷つて置くが、當日水島速成初段の稽古振は、却々見事であつた。僕は見知り見眞似で始めて投の形をやつたが、素人位はゴマカセル積りだ。

午後はベースボールを一二回見て、水島、守谷、松尾、近岡と僕の五人で、新和歌の浦へ散步と洒落た。
望海樓と云ふ旅館の風光明媚の一室に坐して、湯上り丹前ではなくて湯上り裸で勝手な熱を吹いて、軍歌をドシ／＼歌つて、何にも喰はず、茶代一圓を奮發して『グツドバイ』、近來にない面白い一日の清遊であつた。

（評に曰く）望海樓とか云ふ旅館で湯上り裸で勝手な熱を——此の熱には定めし熱爛の熱が加はつて居たに違ひない——を吹いて、軍歌をドシ／＼歌つて、何にも喰はず、茶代を圓助奮發して『グツドバイ』の結尾、極めて吾が意を得たものがある。此の最後の文句は、石渡兄の男らしい意氣を赤裸々に現はして居ると同時に、在大阪の我が先輩の元氣が天に冲して居るのが髣髴とする。僕は大阪と云ふ土地は嫌ひだが、大阪に居る先輩が親しく懷かしい、實に飛び付きたい程だ。（徳生）

商工部の甲信上州地方遠征

幹事岩崎二段監督の下に、商工部員十三名（一級四名、二級三名、三級四名、四級二名）は、近縣に柔道遠征を試みることとなつた。一月八日午前九時香下先生を始め多數の部員諸君に見送られ、飯塚幹事の辭に激励されて勇躍新宿を發し午後三時過ぎ甲府着、直に甲府中學を訪ねたが、電報の読み違ひにて準備整はず、依つて稽古丈けに止めて茶菓の饗應を

受け、それより汽車にて諏訪に到り、牡丹屋旅館に一泊。寒い所とて炬燵の設けあり、入浴夕食を済まして床についたのは十二時過ぎであつた。

翌九日朝食を終へて一行諏訪中學に到る。教室に疊を敷きて道場となす。午後二時より岩崎監督審判の下に勝負を行ひ中堅菅原剛寛能く三名を薙ぎ倒したる爲め、大將副將戰はずして大勝を得ることになった。四時宿に歸り、支度を整へて夕刻更に長野に向ふ。長野五明館に入つたのは十一時半であつた。

十日は午前八時起床、作戦計畫をたてゝ一同長野中學に赴く。一同の働き常の如くならず、長中は大將一人を餘して塾側の慘敗に了つた。長野中學は縣下柔道聯合會に優勝した學校だけあつて、道場といひ試合の態度といひ立派なものであつた。

午後二時更に長野商業から迎を受く。長商は道場は狭いが本式のものであつた。審判は師範の中尉殿と岩崎氏とが交互に勤むこととなり、二時半より試合に入つた。樂に勝つことが出来るとの豫想に反し、長商の中堅に原といふ大漢あり塾方は五人までも撫で切りにされた爲め、中々の苦戦であつたが、大將茂木氏見事に敵の二將を倒して凱旋した。後再び中學の道場に於て中學や商業の人々と稽古をした。それより歸宿して夕飯を食べてゐると、中學から五六名遊びにやつて來た。隠藝などをさらけ出して歡談爆笑、一同が氣を休めたのは一時過ぎであつた。

十一日寒い風に目を覺ますと、外は大變な吹雪、長野でも珍らしいとの話、こんな時に善光寺へ參詣すると、必ず御利益があるとの誰かの説に隨つて、出掛けたものもあつた。十一時一同揃つて宿を出で、汽車で上田に着いたのは午後の一時半頃、出迎の先方の師範に案内され上田中學に至る。こゝでの勝負は中堅稍々振ひしも、先方の大將稻垣氏（講道館一級）の爲め、塾方二將敢なき討死を遂げた。五時辭して夕食を認め、先輩影山氏其他に見送られて六時出發、高崎に下車信濃屋に投宿した。

十二日午前中市中の見物をなし、或は土産物を求め、十二時少し前又車中の人となり、太田に下車し、驛前の茶屋で少憩の後道の悪い中を中學に行く。今日は最後の奮闘をなさんものと、意氣込んで乗り込んだるに、人員不足の爲めとて、止むなく稽古のみにて引上げざるを得なかつた。五時發の汽車にて歸京の途に就く。この行二勝三敗成績は立派なものとは云へないが、三田道場の氣風を地方に發揮すると共に、部員も亦尠からざる経験を得た。午後七時三十分淺草驛着、夕食を共にして後、一同は解散した。(茂木生、ゴーカン生)

一行の人名左の如し。

監督 岩崎清一郎

一級 茂木信太郎、平本六郎、野田市太郎、塙田修二

二級 竹内廣吉、日東寺政男、岩井茂

三級 菅原剛寛、進藤茂、福田與志三郎、森永義忠

四級 中西萬世、三崎善二郎

塾祖の墓參

二月三日は故福澤先生の命日なれば、午前九時部員一同道場に集合、静肅列を正しくして上大崎の墓地に詣でた。こゝに我が塾祖たる大偉人が、永劫の眠りに入つてゐるのである。簡素なる墓、礎石堅く、唯香煙の縷々として立ち上るを見る、亦先生の昔を偲ぶに足る。部員一同懇に焼香後福澤家別邸に立寄り茶を喫し、解散十二時。

故先生の墓參は、先生の歿後部員としては毎年の例なれども、偶々記録に見えたる故、こゝに附記したのである。

横濱電線道場訪問

『學生の分として試験が苦手などと云ふ様では』と、所謂偉い人達は不平かも知れないが、矢張り吾々凡人には、試験はなか／＼難關だ。其第三學期の試験の終へたのは丁度三月二十四日であつた。

稽古好な連中は、試験が終へたら、もう翌日から道場に集つて來て稽古を始めて居る。

二十七日のこと、三段の中野森藏君が道場に見えて『どうだ、皆で一丁横濱電線を訪問しようじやないか』と云ふ。よからう。さて何時にしよう』と誰か云へば、『明日は日曜だから明日にしよう』と云ふ人もあつたが、そこは氣の早い連中の事とてとう／＼『なあに、今から電話をかけて今日晝から行かうちやないか』と云ふ説が勝を占めて、早速其日に行くことにした。

横濱電線と云へば、苟くも我部員諸君には説明するだけ野暮なことかも知れないが、あの先輩の吉武四段や古川三段の行つて居らるゝ會社さ。兩氏の指導の下に會社の社員諸君が立派な道場を設けて、普通の町道場などは足もとへも寄りつけない様な稽古が行はれて居るのだ。かつて野球部で鳴らした肥後さんなども、今では熱心にやつて居らるゝ。もう初段位は充分取つて居る。

寄宿舎へ歸つて中野君が電話をかけたら『よし直ぐやつて來い』のこと。一同大いに元氣を得て、早速訪問することにした。

中野君以下同勢七人、晝食もそそ／＼に、先づ中央ステーションまでテクリ、其處から汽車で神奈川に向つた。會社へ行つたら生憎吉武さんは不在であつたが、古川三段が居られて道場に案内された。

道場は會社から數町離れた所で、社員の俱樂部の中にある。相當に廣い道場だ。

社員の仕事の終へるまで、玉突をやりながら時間を過したが、技倆は七人共互に伯仲の間にあつた。こんなことを云へ

ば皆多少は突けさうだが、なあに一人も突ける人が居ないと云ふ譯さ。

其中に古川さんや肥後さん、其外の諸氏も来られた。早速着物を着換へて稽古を始めた。こんな時の稽古は、互に氣が入つて居るので實に面白い。皆十四五本も續けさまにやつたので、久しぶりで大汗をかいた。

稽古が終へて今度は皆で先輩にかゝらうと云ふ、これも早速話がまとまつて、古川三段の六人掛をやる事になつた。

・ 一級野 田 市 太 郎

・ 一級平 本 六 郎

三段古 川 茂 一
○○○○○●

・ 一級佐 藤 米 藏
・ 初段森 久 則

○ 初段小 山 内
信

○ 二段岩 崎 清 一 郎

流石に三段は強い。いくら現役でも一級ではまだ刃がたまない。野田君は押込に平本君は絞に佐藤君は支釣込足に、それぞれ片附けられてしまつた。森、小山内の兩初段も大いに奮闘したが、左大外と、押込みでこれも破られ、いよいよ岩崎君が出た。我黨氣が氣でない。

『此處で若し岩崎君が負けたら……』と思ふと、もうどうしても岩崎君に勝たせたい。

『南無八幡大菩薩、南無八幡大菩薩』

とう／＼岩崎君がきれいな跳腰で勝つた。『あゝよかつた！』實際これで負けたら、後の氣煙がどんなにこはかつたらうと、一同漸く胸をなで下した。それは／＼たゞでさへ柔道部の先輩は氣煙がすごいんだから、若しこんな時に六人とも負け様ものなら……。今度は岩崎君の五人掛と中野君の六人掛をやつた。

二段 岩 崎 平 佐 本
○○○○● ● 野 田 中 野 佐 藤 本

三段 中 野 佐 本
○○○○○ ● 野 森 田 中 野 佐 藤 本

四段 小 山 崎 平 佐 本
● 野 森 田 中 野 佐 藤 本

これで稽古は切りあげた。久しぶりで面白い稽古をした後で風呂を浴びた時は、實に何とも云へぬ好い氣持であつた。

それから一同二階に招かれ、先輩と卓を共にして大いに御馳走に預つた。主客何れ劣らぬ大食家揃ひの事とて、食ふは飲むは、豫め用意しただけでは足りぬ始末。遠慮なく御馳走になりつゝ面白い先輩諸賢の懐舊談をも傾聴した。

何時までたつても互の氣焰はおさまりさうにもなかつた。

かくて十時四十四分平沼驛發の汽車で先輩連の親切なる御見送りを受けて歸つた。
『あゝ、實に愉快だつた』、とは皆の口から幾度ならず漏れた言葉であつた。全く近來になき愉快なる一夕であつた。(同行の一人)

葉山合宿

五月五日ヴィカース・ホールにおいて有段者會を開き、對高師戰に就て評議の結果、今年より葉山に合宿して稽古に勵むことを決議した。

八月一日より二十日迄、有段者其他葉山義塾水泳部に合宿し、附近の小學校教室を借りて道場を設け、熱心なる夏期稽

古をなす、出席者約二十名、時には三十名もあつた。

選手會

十月十五日選手會を道場に開いた。午後五時部員一同食事に着席、和氣に満ちたる道場は豚の御馳走の舌鼓の音が頻りであつた。暫くの間は口も利かず、横見もせず、一生懸命詰込の手ぎわよさ！『仲々いけてますね。そして君は仲々要領がいい、機敏だな』と誰か云ふと、『さうさ。柔道はまだ五年しかやらないが、食ふ方は二十年間朝に晝に夕に決して缺かさず練習して居るから、立派なき、技を持つて居ますよ』などと云ふ面白い戯談は、あちらこちらから湧て出る。時には罰金を課せられる程の駄洒落も出る。

食事も終りに近づいた頃、尾上幹事から本日選手會を開いた旨意を述べられ、来るべき三大勝負に對して、部員の十分なる覺悟を促された。そして飯塚先生からの高師對木塾勝負の件に就き、有綴者及び有段者特に初段連中の意見を聞きたいとの質問があつたので、有綴者からは後藤辰治君起立して、誠心誠意以て高師と戰をなし、必らず會稽の耻辱を雪ぐべきものであると云ふ一言一句血の出る様な答をした。其時の部員の頭の中には、如何なる舞臺が現れたであらうか。必ずや昨年の秋小雨の降つて居た夕、涙を呑んで高師の校庭を去つた、あの哀れな悲劇を思ひ起さない者はなかつたのである。そして今福樓上であの慘憺たる光景一大將飯塚君は、其敗戦を自分の責任の如く考へ、泣て部員に語つたのであつた。その時部員はよく戦つた飯塚君を慰める言葉を見出さなかつた。そして飯塚君と共に泣いたのであつた。語る事聞く事たゞ涙であつたのだ。後藤君はまだ言葉を續けて居る。部員の眼は異様に輝いた。部員の筋肉には微動を覺へた。有段者を代表して初段松永君立ち、高師と戰ふべき策戦は只稽古あるのみ、十分なる稽古をなし、部員一同一體となり之に當たれば、必らず月桂冠を手にする事が出来ると述べた答には、誠意が現はれて居た。

最後に飯塚師範からの對高師試合に關する訓示があり、各自決心を固めて九時に解散した。

三田柔道俱樂部對横濱電線試合

大正四年より暫くの間、先輩中村、湯本諸氏（後に佐野三段も加はる）の指導に依り、十數名の會社員が綱町道場を根城として夜稽古を勵み、之を三田柔道俱樂部と稱してゐた。又一方横濱電線會社にては、前に記せるが如く吉武、古川氏等の訓練の下に、立派なる道場に於て、社員の稽古が行はれてゐた。恰も好取組であつたので、この兩者の間に時々對抗試合が行はれた。

その第一回の試合は本年三月十四日綱町道場に行はれ、東京方の大將土城氏が横濱方の平沼氏の爲に投げ飛ばされて勝敗に了つた。六月二十七日その復讐戦として東京方は横濱を襲ふたが、土城氏再び菅瀬氏に敗れて、二戰二敗の苦を嘗めたのである。爾來毎夜益々稽古を勵み、技を鍊り、雪辱戦に備へてゐたが、丁度本年柔道部大會午前の紅白勝負後、その第三回目が衆人環視の間に行はれ、東京方は今度こそ横濱方の大將を討取つて大勝を得たのであつた。この戦に於ても、先輩平沼亮三氏自ら横濱方の大將となりて出馬し、健氣にも奮戦したるは、當日の異彩であつた。



進級一括

○一月十七日講道館鏡開式に於て

初段へ 平賀千代吉、神崎清一、吉年研三、森 久則、金子友八、大隅敏雄、吉澤憲治、小山内 信、舟木道敏
二段へ 幸田 義、尾上繁二、坂東舜一、菅井 清、岡田一郎

三段へ 牛久孝四郎、徳永秀夫、島 泰次郎

○一月三十一日月次勝負の結果

二級へ 笹島治兵衛、福田與志三郎、永井元孝

○二月二十一日卒業生送別紅白勝負の結果

二級へ 渥美得一、葉山健二郎、進藤 茂、菅原剛寛、渡會徳太郎

○三月十一日講道館昇段式に於て

初段へ 月成元氣

二段へ 關川源三、岡 善次

三段へ 中野森藏

○五月九日新入生歓迎紅白勝負の結果

二級へ 松村織彦、志賀勝治、井畠正義、岩崎清二郎、相川 涉

一級へ 鈴木元吉、田中健吉、竹内廣吉、中村武雄、伊藤文健、永井元孝、渥美得一

○六月十四日講道館昇段式に於て

初段へ 庄野英樹、植木義雄、岩垂捨三、松永進一

二段へ 下川健太郎(先輩)、田中祐吉

三段へ 岡 善次

○六月中の聯合試合及び月次勝負の結果

二級へ 安部 昇、平塚英一、高井孝一、阿部英兒、間中 廣、中村隆一、染中眞一、篠田富士雄、田中泰藏、茂木邦

吉、小林武次郎、廣瀬海人

一級へ 若槻清一、岸田寅之助、庄司房雄、徳田信重、佐々木平太郎、瀧川純三、伊藤親雄

○九月二十四日の月次勝負の結果

二級へ 福田善四郎、崔燦鶴、高麗正夫、茂木芳次郎、中谷貫一、阿部大六、横山 巖、森永義忠、岸 清一

一級へ 間中 廣、葉山健二郎

○十月九日講道館昇段式に於て

二段へ 小山内 信

○十一月十五日講道館昇段式に於て

初段へ 葉山健二郎、伊藤親雄、中山信市、永井元孝、大原幸太郎、甲斐義智

二段へ 萩原 準

○大會其他の勝負の成績に依り

二級へ 高地萬里、川崎八次、中西萬世、安増潤一郎、吉田精二

一級へ 渡邊英一、津田 茂、岩井 茂、志賀勝治、小林武次郎

○十一月二十七日月次勝負の結果

二級へ 清水行信

一級へ 高井孝一、福田興志三郎、進藤茂

二〇 大正五年史

(一) 寒 稽 古

本年は寒稽古を一月十一日開始し、期間を短縮して二十日間となし、一月三十日に終る。皆勤者九十六名、精勤者四名であつた。

寒稽古中一月二十三日月次勝負を行ひ、岩崎三段の五人掛、中野三段の七人掛があつた。

(二) 卒業生送別紅白勝負

二月十三日

(紅)

木

間

宮

(大外刈)
清

水

中 安 澤

村 田 田